い道義的制裁政策がいかに無力であつたかは歴史が明かにして居る。ボーグ博士は当時の極東外交史を偲んで、アメリカ政府が維持した「消極性は我々の特徴であつた、そして此の事柄は当時を回憶するにあたつて最も驚くべきことである」と本書を結んで居る。

本書は全体を通じてアメリカ極東外交の推移を感情に走ることなく冷静、忠実に洞察し、ドラマタイズすることなく、客観的、実証的な研究態度で貫かれてをり、研究書として最高の作品と云つても過言ではない。本書がコロンビヤ大学から一九六五年度のバンクロフト賞を授与されて居る事実を以つても、外交史研究書としての本書の優秀性をうかゞう事が出来る。

資料文献としてはアメリカの国務省文書、主要な既刊研究書は勿論、未公開のルーズベルト、グルー、スチムソン、ジョンソン、モファット、ヤーネル、リーヒー、デイヴィス各氏の日記、メモアール、私文書を充分に駆使して居る。更に当時の New York Times, Chicago Tribune, Christian Science Monitor, Cleveland Press, Los Angeles Times, Milwakee Journal, San Francisco Examiner, San Francisco Chronicle など八紙の極東問題社説研究（此の研究は本書と平行して行われた）を充分に活用して居る。本書は日米外交研究者にとつて貴重な必読書であり、水くレファランスとしてちよう用されるであろう。

唯一つ評者が遺憾に思う点は英国外務省、日本外務省の公文書が資料としてあまり使われて居ないことだ。此の種類の研究書が刊行される度に痛感されることであるが、各国学者間の資料交換、協同研究が必要であることがなほ一層望まれる。最近この様な気運が少くとも日米学者間に抬頭し、来年に日米学者協同の日中戦争史研究が発足する段階になつたことをつけ加へておきたい。

(Borg, Dorothy: The United States and the Far Eastern Crisis of 1933—1938. Harvard University Press, 1964, p.p. 674)

三上・石川・芝共訳

『抗日軍政大学の動態』

——関係資料の紹介をかねて——

藤田正典

一

現在、中国人民抗日軍事政治大学（抗日軍政大学と略称さ

れ、さらに略して抗大ともいう）について研究することは、二つの意味においてすこぶる重要である。その一つは歴史的意味における重要性である。すなわち、抗日戦争の直接の遂行者であつた八路軍、新四軍など中国共産党の指導する軍隊の軍事・政治幹部を養成した抗日軍政大学は、中国共産党の数多い教育機関のうち、抗日戦争遂行に質的にも量的にも最も貢献したと思われるのである。しかるに従来、日本には抗日軍政大学についてのまとまつた調査、研究はなく、そのため同大学の全貌はおろか、その一側面すら十分知りえないのが現状である。中国においては昨年、抗日戦争三十周年をとくに記念して、抗日戦争の意義を再評価しているが（林彪『人民戦争勝利万歳』）、日本においても抗日戦争を歴史学の立場から全面的に研究してよい時期に来ているし、その研究の一つの手がかりとして抗日軍政大学についての研究に着手してよいのではあるまいか。

次は現在的意味における重要性であるが、現在中国でおこなわれている社会主義文化大革命において「人民解放軍に学べ」というスローガンが叫ばれ――いうまでもなく人民解放軍とは抗日戦争時代の八路軍、新四軍などの中国共産党軍の後身である――、さらに学制を抗日軍政大学を手本にして改革しようとする動きがあることである。そうして紅衛兵の改名運動のなかで、北京のある中学校は「抗日軍政大学付属中学」と改名することを宣言した、というニュースも伝えられている。したがつて今後の中国の動きを推断するためには、抗日軍政大学について正確な知識が持つことが必要となつてきているのである。

二

このように、抗日軍政大学の研究は二つの重要な意味をもつているが、その研究の手がかりとなる文献が、昨年右のように翻訳刊行されたので、簡単に紹介してみたい。

三上諦聴・石川忠雄・芝田稔訳注『抗日軍政大学の動態――中国共産党史研究の一資料』関西大学東西学術研究所集刊四、昭和四十年三月三十日、関西大学東西学術研究所発行、A5判、二二〇頁。

1　本書の原著書である『抗大動態』は、漢口動員社の同人たちが抗日軍政大学をルポして一九三八年分担執筆し、これを海燕が編集したものである。本書の構成は、まえがき（海燕）、特別寄稿三篇（艾思奇、何思敬、徐懋庸）、本文、付録と訳注者の手になる地名・人名索引とからなる。本文は二十二節に分かれ、最初の数節がいわば基礎篇、残りが生活記録篇ともいうべきものであり、付録として（1）抗大学生募集要綱（2）抗大学則（3）原著書所有者の書き込みの要約、の三篇が付載されている。

2　本書は「まえがき」でいうように「抗大はどうして生れ、発展したか？　如何にして幾多の新しい方法やりかたを創造し、いきいきした新鮮な躍動的な事実を生んだか。それは如何に学習しこれを見ならわねばならない価値があるか？」を、抗日救国の方途を暗中模索していた当時の青年に教えることを目的にしている。特別寄稿の三人はいずれも抗日軍政大学の教授で、艾思奇の「救国教育への新貢献」では、同校は過去の教育がもつた欠陥をすて、長所を保存助長した教育制度をもつが、これは教育至上主義ではなく、抗戦救国に役だち、政治軍事の実際に適合した教育制度である、とする。何思敬の「抗大の精神」では、抗日軍政大学は中国青年のメッカであり、抗日民族統一戦線の縮図である、といい、徐懋庸の「孔子主義を実行する学校にあつて」では、抗日軍政大学は「乏しきを分つ」孔子主義を生活の面のみならず、教育制度の面においても実行している、と主張する。

3　本文の基礎篇ともいうべき教節においては、抗日軍政大学の生いたちと教育内容が語られている。すなわち、同校は一九三六年、江西時代の紅軍大学の名称を踏襲して陝北に誕生した。しかし教育方針、教育内容は、すでに抗日民族革命戦争のための幹部養成という、時代の要請にこたえるものに変わつていた。第一期生は紅軍の高中級幹部からなり、教員はわずか三人、学生は二四〇余人で、林彪は校長であると同時に学生でもある、という状態であつた。西安事変が勃発（一九三六年十二月）してのち第一期生が卒業したが、抗日軍政大学と名称が変わつたのは、このころである。第二期生は長征をおこなつた第一、二、四方面軍の一千人以上の幹部と中国各地からやつて来た数百人の学生青年であつた。抗日戦争がはじまると第三期（一九三七年九月末―三八年四月）が開校し、学生はさらに増加し、二千人以上の国内外からの学生青年、前線部隊の幹部が入学した。第四期は徐州の陥落（一九三八年五月）にあたり開放し、収容人員は五千人に近いほどに急増した。以上のように抗日軍政大学の歴史が語られ、ついでこのような学生の急増は、校舎の問題、経済上の問題、教員不足の問題等々の多くの困難に拍車をかけた。これをどうやつて解決したかについては、具体的に記されているが、その解決への努力のなかから、幹部が団結し、幹部が模範を示すこと、政治動員を浸透させること、決定した方針を自分のものにし、努力を堅持して断固実行すること、健全な組織をもつこと、が困難解決の基本的原則であるという教訓を体得したことが強調されている。

4　こうして幾多の困難を解決した経験をふまえて、抗日軍政大学の教育原則がうち出される。それは（一）理論と実際の連系（二）厳選された課程と精緻な授業（三）範を示す教育、の三つであつて、この原則に立つて次の三つの教育方

針がうちたてられた。(1) 政治上の抗日民族統一戦線 (2) 軍事上の進攻戦法 (3) 精神上の革命の伝統 (崇高にして遠大な政治的理想。艱苦に奮闘する英勇的犠牲的精神。団結・緊張・活潑・厳粛の校風の発揮)。

なお現在、右の三つの教育方針は (1) 確固とした正しい政治方向 (2) 困苦欠乏にたえ、質素をむねとする作風 (3) 弾力性をもち機動性にとむ戦略と戦術、という言葉で表現され (「人民日報」一九六六年七月三十一日)、八文字の校訓とともに抗大の「伝統的な学風」とされている (「人民中国」一九六六年二号)。

5　次の生活記録篇ともいうべき諸篇では、学習・工作あらゆる面における競争——革命競争と呼ばれる——、壁新聞、演劇、歌謡、体育、夜会、起床から授業・就寝まで、新しいタイプの女性、行軍、射撃演習、生産運動、募金運動、雑務員に対する教育など、抗日軍政大学の日常生活の細かい点までいきいきと描かれており、その描写のなかから、教育原則・方針がいかにつらぬかれているかを、うかがうことができる。

三

次に抗日軍政大学に関する、ほかの資料についてふれておきたい。

馬国昌『延安求学記』一九五九年、湖北人民出版社は陝甘寧辺区のなかで国民党軍の胡宗南軍と対峙とする最前線陣地である甘粛省東華池県に、一九四三年六月一日開校した第七分校 (校長彭紹輝、副校長兪楚杰) に著者が入学するまでの記録および開校当時の生活記録である。なお同一著者の回顧録である

馬国昌「三種の宝器——抗日大学第七分校の開校当時の思い出」(『人民中国』一九六三年八号、原題不詳)

は第七分校の開校当時の短文生活記録ではあるが、前書と内容的に異同があり、単なる前書の摘要ではないようである。以上は軍政大学の後期の記録であるが、さきに紹介した『抗日軍政大学の動態』とほぼ同じ時期を扱うものに

陳学昭『延安訪問記』民国二九年、北極書店

のなかの一節「抗日軍政大学」がある。なお厳密にいうならば、約一年ほどあとまでの、すなわち一九三九年末ころまでの記述がある。また抗日軍政大学の第三期 (一九三七年九月末—三八年四月) だけを扱ったものには

牛克倫「熔炉」(『人民日報』一九六五年八月二十三日、邦訳＝『人民中国』一九六六年二号所載「延安抗日軍政大学での日び」)

がある。抗日軍政大学の前身や変遷についてスケッチしたものには

劉道生「森林中的紅軍大学」（『中国青年報』一九五七年七月二十七日）

がある。これは一九三三年紅軍大学の第一期生の入学・生活記録である。

何長工（談）「回憶紅大、抗大和軍大」（『光明日報』一九五七年九月十五―十七日）

は、抗日軍政大学の歴史、変遷を概観するきわめて貴重な資料である。何長工は紅軍大学校長、抗日軍政大学の指導員をやった人。何長工の右の記述ほど詳細ではなく、抗日軍政大学だけに限定された資料としては、人民解放軍総政治部の主催にかかわる「抗大校史展覧会」の紹介記事（『人民日報』一九六六年七月三十一日、八月二日）がある。

なお七月三十一日付の記事は、写真をいれて二ページにわたるスペースをさいて、「高挙毛沢東思想偉大紅旗、継承和発揚抗大光栄伝統」という二ページとおしの大見出しをつけ、「最新型、最革命、最進歩的学校――中国人民抗日軍事政治大学介紹」のサブ・タイトルをつけている。八月二日の紹介記事にも「全面貫徹毛主席偉大教育思想的光輝典範」という抗日軍政大学を評価した大きな見出しをつけている。これらの記事内容は何長工の記述と若干の異同はあるが、それはともかくとして、右のタイトルでもわかるように、抗日軍政大学に対する現在的意義における高い評価に注目を払わざるをえない。同じ八月二日の『人民日報』には、本年七月の解放軍全軍院校政治教育改革会議の席上における葉剣英の講演要旨が掲載されているが、その記事のタイトルは「高挙毛沢東思想偉大紅旗、以抗大為榜様、弁抗大式的学校」で、文中でも学校教育の目標を「……継承和発揚抗大的優良作風、弁抗大式学校」といつて、抗大を名指しにしている。

以上挙げた資料のほか、断片的な記述はよく見うけられるが専著というべきものはなく、E. Snow は Red Star over China などのなかで紅軍大学当時の抗日軍政大学について、また N. Wales は Inside Red China のなかに抗日軍政大学について、それぞれ言及しているが、章節をもうけて記述するほどでもない、簡単なものである。こうみてくると、『抗日軍政大学の動態』は、抗日軍政大学の初期の約二年間（第一期から第四期まで）の短い時期を扱つているにすぎないので、この書から抗日軍政大学の長い変遷のあとをたどることができないのは遺憾であるが、抗日軍政大学の長い伝統の基礎をうちたてた初期の二年間の資料だけに、抗日軍政大学の伝統を考えるうえには、きわめて重要な資料といいえよう。さらに抗日軍政大学のあつた陝甘寧辺区に対する国民党軍による封鎖が、はやくも一九三九年末からはじまり、抗日軍政大学をふくむ中国共産党地区のニュースが外部に伝えられなくなり、したがつて抗日軍政大学に関する当時の資料を

眼にすることができなくなつたこと、さらに抗日軍政大学についての知見が現在未曾有の強さで要望されていることを考えあわせると、『抗日軍政大学の動態』の資料的価値はますます大きさを加えているということができる。

最後に『抗日軍政大学の動態』について若干の不満を述べさせてもらうと、陝西省の「陝」が数カ所で「陝」となつていたり、「辺鄙」とすべきを「偏俾」とするような例が二、三見うけられたり、また「ウ」とよむべき「于」を索引で「ユ」とよんだり、誤植のためか、索引のページ数で項目が検出できないものが若干あつたりする。また訳文の「ジミトノーフ」は「ディミトロフ」と、「プリュノーフ」は「プレハノフ」とそれぞれ訳すべきかと思われる。

四

最後に、以上の数少ない資料をもとにして、抗日軍政大学の変遷をあとづけて、研究者への一助にしておきたい。

中国共産党が軍政幹部を養成する機関として最初に設けたものは、一九三一年秋、国民党軍の第三次包囲攻撃戦のあとに設立された紅軍学校であつた。ついで三三年十一月七日、瑞金の西六キロの森林のなかで、紅軍大学（校長何長工）が誕生した。紅軍大学では劉少奇、周恩来、朱徳、任弼時、董必武、劉伯承、鄧小平らが講演をしており、蕭勁光、周子弟、蘇進、伍修権らの教員を擁していた（毛沢東の名が見えない）。三四年の長征にあたつては、紅軍大学在学の高級幹部の編成する上幹隊と、紅軍学校（当時公略軍校、彭楊軍校があつた）に在学する、各部隊から来ていた連・排級幹部の編成する歩兵営、特科営とからなる幹部団が編成され、団長に陳賡、政治委員に宋任窮が任ぜられた。幹部団は中央機関、首長の警衛にあたるほか、重要な戦闘にも参加し、大きな損害を蒙つた。また遵義会議では、毛沢東の全党内における指導権確立のために積極的な役割りを果たした。長征が終わつて三六年六月一日、紅軍大学は中国抗日紅軍大学と名を改め保安県で開校し、翌三七年一月中国人民抗日人民抗日軍事政治大学と改名して延安に移つた。中国抗日紅軍大学当時から校長は林彪、副校長は羅瑞卿であつた（教育長羅瑞卿とする記述もあり、最近の中国の資料では校長兼政治委員林彪とする）。教育委員会主席には毛沢東みずからがなかつたことは、毛沢東がいかに抗日軍政大学の教育を重視したかを示すものであろう。毛沢東の重要な論文のいくつかは、ここではじめて講演されたものであつた。すなわち「中国革命戦争的戦略問題」（一九三六年十二月）は抗日紅軍大学での講演であり、「実践論」（一九三七年七月）と「矛盾論」一九三七年八月）はともに抗日軍政大学第二期生に対する講演であり、「被敵人反対是好而不是壊事」（一九三九年五月）は同大

学成立三週年のために執筆したものであつたのであつた。毛沢東のほかに、劉少奇、朱徳、董心武、林伯渠、徐特立らの党幹部はしよつちゆうここへ来ては講演をしており、前線から延安へ帰つて来た軍政幹部は必ずここへ来て報告していた。

抗日軍政大学の第一期から第四期までの動向については、すでに述べたので、ここで再び触れることを避けるが、一九三八年十月、抗日軍政大学総校と第一分校は太行山へ、第二分校は晋察冀（阜平県）へ出発し、日本軍の背後で幹部を養成するという新任務に着手した。とくに三九年以降の陝甘寧辺区に対する国民党軍の封鎖が強化するにともない、日本軍の背後で幹部を養成する必要が増大した。こうして太行山にさらに第六分校が設けられ、新四軍にも総分校が設けられ、一九三六年から四五年のまでに各抗日根拠地で十二ヵ所（八路軍地区で十ヵ所ともいう）の分校が設けられ、本校、分校あわせて十余万人（二十余万人ともいう）の革命幹部を養成した。

一九四五年抗日戦争が終わると、本校と各分校は中国人民解放軍軍事政治大学と改称され、ひきつづき革命幹部の養成にあたつたが、何長工は次のように述べている。すなわち、抗日戦争が終わると、抗日軍政大学総校と延安の魯迅芸術学院などの学校は、東北へ挺進せよという新任務をあたえられた。東北では抗日軍政大学は東北軍政大学と改名し、四つの分校をもち、数万の軍政幹部を養成した。とくに注目すべきは、多数の蒙古族、朝鮮族の幹部を養成するための分校を二校もつたことであり、また新兵の動員訓練に、旧満洲国軍隊の改造に、寝返りをうつたり捕虜になつたりした蔣介石軍の改造にも、大きな役割りを果したことである。たとえば、蔣介石軍のなかで最も頑強であつた新一軍、新六軍の捕虜将兵の多くは、東北軍政大学で改造の第一歩を踏み出したのである。こうして一九四八年東北の人民解放軍の関内進出にともない、東北軍政大学も関内に進出し、全国解放後、軍政大学その関係部門は合併拡張されて近代的軍事学校となり、軍政幹部養成の二十年に近い歴史の幕を閉じたのである。

（一九六六・九・一六）

批評と紹介　辛島

ニーラカンタ＝シャーストリー著

インド史の史料

——とくに南インド史の——

辛島　昇

本書は、インド史学界の長老であり、南インド史の大家で